

草の芽句会だより

NO,119
18,7、5

梅雨の街コミュニティバスの色冴える
三人の雨傘揺れる梅雨の城
貞子

雨音の大きくなりぬ梅雨の城
咲き残る合歓一輪に風ひそか
純子

びしょ濡れの梅雨の句会となりにけり
かやつり草幼時の思い出話かな
範子

茶会終へ鴨居に吊す夏衣
梅雨明くる豪雨のあとの青き空
禮子

話し声遠くに聞こゆ合歓の雨
夏蓬長けたる栃の木御門跡
剋子

七月の晴れわたる空讃岐富士
花一輪ゆれ咲く雨の木下閣
芳子

木槿咲く子とたわむれし日もありき
大雨警報ようやく解除雲の峰
節子

被災地に想いを馳せる暑さかな
被災地に夏日照りつく容赦なく
貞

防塵のマスクの下の汗の玉
打水に飛び出して来る親子猫
文子

出席者 川原 森 吉崎 馬場 小山
投句者 小林 氏家 真鍋 大黒

朝から大雨になった。傘をさしていても全身ずぶ濡れ、靴の中にまで水が溜まる。それでも
漆林には梶子が匂い、濠端には咲き残る合歓の薄紅色が枝先で揺れ、「アメニモマケヌ」私達を
迎えてくれた。出席者は五名と少なかったが、その分はお喋りでカバー、いつもにも増して
盛り上がる。なにやら昔懐かしい味のお菓子が用意されていて皆大喜び。「これ値段の割に美味
しいやろ」「二個づつな」アイスコーヒーもでて大満足。いつもながらお世話係さんに感謝である。
暑さはまだこれから。「来月も元気で会おうな」お互いを励ましあって散会となった。

